たちばな　平成13年1月1日発行　第34号

たちばな

新年あけましておめでとう御座います

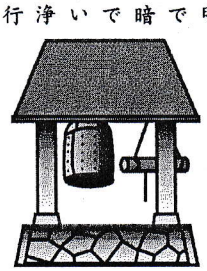
暮れの慌ただしい時間が、除夜の鐘で一変し、二十一世紀の新しい一年が始まりました。二十世紀の世の中の混乱は、明治期の混乱に似たものを感じます。江戸時代に鎖国政策をとり、諸外国と交流を持たなかった日本が、明治維新を迎えて急激に西洋の文化を取り入れ、二〇〇年もの遅れを一挙に取り戻し、諸外国に追いつく為に、西洋の新しい文化を十分に理解し消化する時間もないままに、背伸びした状態で引き起こした混乱です。日本は、戦後の復興と高度経済成長、所得倍増、列島改造などを旗印に、背伸びした状態で頑張った結果、経済大国と言われるまでに成長しました。しかし、その経済的発展が真に人々の幸せに通じているのか確認する暇もなく、急激に進展した結果、「経済的豊かさ」を手にすることはできたようですが、「心の豊かさ」を失ってしまった。その結果、公の立場にある人の判断も曇り、人の命を粗末にする状況が生まれたものと思います。二十世紀後半の異常な事件や適切な判断に欠けた状況は、精神的裏付けがなく、経済や科学が急速に進歩し精神とのバランスが崩れた結果起こった現象ではないかと思います。二十世紀と二十一世紀を定義づけると、二十世紀前半は戦争の時代であり、大勢の人が苦しみ、後半は経済の時代で多くの人が便利さとものの豊かさと贅沢を味わいました。しかし、自然とともに生きてきた人間本来の姿も精神の豊かさも社会から陰を潜めてしまった。社会人として幸福な人生を歩む為に二十世紀に欠けていたのは精神ではないかと思います。二十一世紀は心を大切にする時代だと思います。

水谷山 寶清寺

除夜の鐘

当山では、大晦日、十二時に除夜の鐘を突き、新年厄除け開運の祈願を行っています。

ご存知の通り、十二月三十一日の夜を除夜と言います。昔の暦である太陰暦でいう晦日三十日の事ですが、この日は、月の光を失う暗闇とされていました。そこでこの日を「月が隠れるつごもり」からつまって「つごもり」と言っていました。特に年末の十二月三十一日は一年中で最も光りのない、一番暗い夜であることから大晦日と言い「おつごもり」と言われ、この闇の夜から元旦までの行事は、厳粛な仏事として大切にしてきました。全国各寺院で除夜に撞かれる鐘の音と共に新年の到来を実感します。除夜にはこの内なる世界の暗い心の闇を取り除きたいという思いから、私達は百八の煩悩を打ち破る鐘を撞き、心身ともに清らかな新年を迎えようと願います。除夜の鐘はまさしく古き年から新しい年にかけての接点にあって、自らの暗き煩悩を取り除いて喜びを分かち合う鐘だと思います。もとも、この世は光明に輝いているのです。それを煩悩が暗闇にしているのです。人間の限りない煩悩を除き、心を浄化する事が除夜の行事の目指す所です。



新しい仏壇と開眼供養

「仏壇を購入すると死人がでる」などというバカげた話がありますが、それは全くの迷信です。仏壇を購入するのは、ほとんどの場合、新仏が出た時です。恐らく、この事実が逆さまになって広まったのでしょう。同じように「閏年に仏壇を買うな」という説も迷信に過ぎません。現在ではいつ求めても良いとされています。仏壇は一家の中心であり、小さな寺院なのですから、求めようと思った時が吉日かもしれません。しかし、一般的には、お彼岸・四十九日・一周忌など故人の忌日法要に合わせて求めている人が多いようです。新しく仏壇を購入した時は、住職を招いて「開眼供養」をしてもらわなければなりません。この儀式は仏壇や位牌などに魂を入れるもので、この儀式を経て、仏壇やご本尊は霊験あるものに生まれ変わるとされています。日本で初めてこの儀式が営まれたのは、奈良の東大寺大仏の開眼供養と伝えられています。開眼の法要は「入仏式」「入魂式」「開眼供養」「お魂入れ」「仏壇開き」等、様々な呼ばれ方をしています。

お願い　お題目納経について

日蓮宗では平成十四年（二〇〇二）の立教開宗七五〇年慶讃事業としてお題目の納経を行います。お題目総弘通運動の輪を広げ、立教開宗の聖地、清澄寺に記念碑を建立し納経することを目的としています。お題目及び祈願文を記入し一枚につき、三〇〇円の納経料を添えて申し込むだけで、誰でも簡単に納経できます。祈願用紙は管理寺務所に用意してあります。新しい年に家内安全・身体健全・商売繁盛・除厄開運等の祈願をしてみませんか。今回限りの納経祈願です。ご法事の折りにも申し込みができます。

くらしの中の仏教語

「愛　嬌」

「愛嬌がよい」は、現代では、ほがらかであったり、人づきあいのよいことを指します。「男は度胸・女は愛嬌」ということわざもありますが、現代では口にする人も少なくなりました。「愛嬌」は本来は仏教の言語で、菩薩の容姿を表わすものとされていました。いまでは「愛嬌」と書きますが、もともとは「愛敬」と書き、昔はこれを「アイギョウ」と読みました。「愛嬌」は仏教語の「愛敬相」からきた言葉です。「愛敬相」は仏の慈愛に満ちた表情のことで、人々が敬愛せざるをえない顔のことなのです。

秋川仏教会主催参拝旅行報告

『和尚さんといく二度目の修学旅行』

二泊三日で四天王寺と飛鳥・奈良の団体参拝旅行は、信貴山玉蔵院の宿坊に泊まる等、仏教会主催ならではの内容に参加者は大変満足していたようです。秋川仏教会では、毎年秋に団体参拝旅行を計画しています。ご案内の折は大勢の方が参加されることを希望致します。

発行 寶清寺 東京都あきる野市小川101番地　電話 042-558-2663　FAX 042-558-2693　たちばな会館　電話042-550-5868